

## 高校2年生

### 平和を学ぶ

—沖縄からみつめなおす、自分、日本、世界—

石 川 久 美・柳 田 嘉 久  
杉 本 雅 子・滝 口 恵 子  
佐 藤 俊 樹・佐 藤 喜世恵  
鈴 木 克 彦

【抄録】 高校2年生では、沖縄研究旅行を手がかりとして、“平和”とは何かを考えた。沖縄の歴史を学び、自分を見つめなおし、日本をとらえなおし、世界へと視野を広げながら“平和”を学び考えることが、生徒のキャリア形成の手助けとなることを目的としている。

【キーワード】 平和 沖縄研究旅行 沖縄フィールドワーク キャリア形成

#### 1 学年テーマと目標

学年テーマは「平和を学ぶ」である。しかし、大きなテーマであるため“平和を学ぶ”には何か手がかりが必要である。高校2年生では、11月に沖縄での研究旅行がある。この沖縄での研究旅行を手がかりとして、“沖縄”という特色ある場所を知り、実際にその地に立ち、沖縄が私たちに投げかける問題を受けとめ、ともに考えていくことを高校2年生の目標とした。

“平和”、“国際理解”、“人権”という言葉はよく耳にするが、自分なりの定義や受けとめ方ができていない場合も多い。一年を通して、沖縄から歴史を学び、自分を見つめなおし、日本をとらえなおし、世界へと視野を広げ、平和を学び考える機会とすることをねらいとしている。そして、この大きな問題を考えることが生徒のキャリア形成の手助けとなり、“人生を自覚的に選択する”という総合人間科の目標へとつながることを願っている。

#### 2 一年間の活動内容

- 4月15日 オリエンテーション
- 5月6日 プレ研究グループ分け、テーマ決め、  
分担決め、調査方法決定
- 5月20日 プレ研究調査、発表・討論準備
- 6月3日 プレ研究の発表
- 6月17日 沖縄研究グループ決定と研究テーマ決め
- 7月1日 研究テーマ追求活動、中間報告
- 7月15日 教育学部 植田先生 特別講義
- 9月2日 フィールドワーク行程の検討
- 9月16日 フィールドワーク先との交渉

- 9月30日 フィールドワークの追及内容と質問内容  
の確認
- 10月7日 フィールドワーク先への依頼文の発送
- 10月21日 研究内容の中間発表会
- 11月4日 フィールドワーク行程の最終確認
- 11月14日、15日、16日、17日  
沖縄研究旅行
- 11月18日 お礼状書き
- 12月14日 沖縄研究旅行フィールドワーク発表会1
- 12月16日 沖縄研究旅行フィールドワーク発表会2
- 2月17日 研究集録仕上げ
- 2月17日 小論文作成
- 3月17日 討論会

#### 3 生徒の取り組みの様子

##### (1) プレ研究と沖縄クイズ

沖縄についてあまり知らない状態では、研究旅行のテーマを選ぶことが難しいため、まず、各クラス6グループに分かれて、6つのテーマについて調べ、クラスで授業を行った。なるべく沖縄をいろいろな角度から紹介してもらうために、次の6つの大きなテーマを設定した。

- ①沖縄の自然（気候、風土、動植物、リゾート開発と環境破壊など）
- ②基地問題（安保条約・地位協定、基地と人権の問題、基地の及ぼす影響など）
- ③沖縄の食生活（食文化、長寿食など）
- ④沖縄の産業  
（観光リゾート、基地産業、サトウキビ、パイナップル、生花産業など）

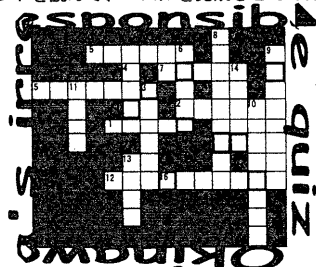
- ⑤沖縄の文化（歴史、伝統工芸、踊り、沖縄民話、音楽、沖縄サミットなど）  
⑥沖縄戦（沖縄戦の真実と背景、皇民化教育、地上戦、ひめゆり部隊など）

担任団7人のうちの6人がそれぞれ1つのテーマの指導教官となり、3グループの指導を行った。食生活のグループでは、にがうりの酢物を作って試食をしたり、紅芋羊羹を作るところをビデオに撮って紹介していた。他のグループも、沖縄戦のビデオを使ったり、写真、手記の朗読を入れるなど工夫をして授業を行うことができた。

9月からは研究係が毎日沖縄クイズをつくり、すこしずつ基礎知識を増やしていった。中には次のようなクロスワードパズルにするなど、工夫を凝らしたクイズも見られた。

## 沖縄の小クイズ

次のヒントを読んで、パズルを完成させてください。



琉球政府について

- |                             |                                      |
|-----------------------------|--------------------------------------|
| 3 沖縄の音の呼び名。                 | 1 琉球政府は、アメリカ統治時代の沖縄における              |
| 4 アメリカは日本を?????主権国にしようとした。  | ?????政府。                             |
| 6 日本は?????に位置する国。           | 2 沖縄を????(まとめること)するためにできた。           |
| 8 議長クラスの役職は、?????により        | 5 司法・行政・立法に分ける政治の仕方。                 |
| 任命制がとられた。                   | 7 住民自治の議長。                           |
| 9 自分たちで議長を選ぶこと。             | 11 当時のアメリカの大統領。← <u>ドワイト・アイゼンハワー</u> |
| 10 もっと自分たちだけで政治をしたい。        | 12 当時の日本の首相。(の名字)                    |
| 13 1960～75年に戦争が行われた国。       | 15 沖縄の施政権返還のこと。                      |
| 14 アメリカによる日本の支配などのことを、????? | 16 琉球政府の公文書は歴史資料として沖縄県??             |
| ?支配という。                     | ?????に一括して保管されている。                   |

太枠内の文字を使って、ある言葉を作ってください。ただし、4文字目には濁点が入ります。

## (2) 名古屋大学教育学部植田健男先生の特別講義

名古屋大学教育学部 人間発達科学科 学校教育科学講座 植田健男助教授に『共同の中での「学び合い」』というテーマで特別講義をしていただいた。実際のフィールドワークの実践を具体的に話していただいたため生徒も興味をもって聞くことができた。中には講義の後にフィールドワークの報告書を見たいと植田先生に交渉している生徒もいた。また、映画「学校3」のビデオも交えて、「学び合い」について問題提起をしていただき、「沖縄研究旅行を通して学びあう」ことへの導入となった。

## (3) 沖縄研究旅行行程

ブレ研究終了後に研究旅行実行委員を募集した。113人の生徒の中から20人の立候補があった。この研究旅行実行委員会で検討しながら、おおよその行程を次のように決定した。

### \*11月14日(火)

名古屋空港(8:35)ー那覇空港(11:05)ー昼食ーアブチラガマにて平和セレモニー(13:15)ー首里城(15:00)ー沖縄レインボーホテルー安里要江さんの講話

### \*11月15日(水)

ホテル発(8:00)ー嘉数高地(8:30)ー平和祈念公園(10:15)ー昼食ーひめゆりの塔・平和祈念資料館(13:15)ー大渡海岸(講話・コンサート)ー沖縄レインボーホテルーコンサート・エイサー

### \*11月16日(木)

各班ごとにフィールドワークへ出発(8:30)ーかりゆしビーチリゾートホテル着(16:00) 平和メッセージ作成

### \*11月17日(金)

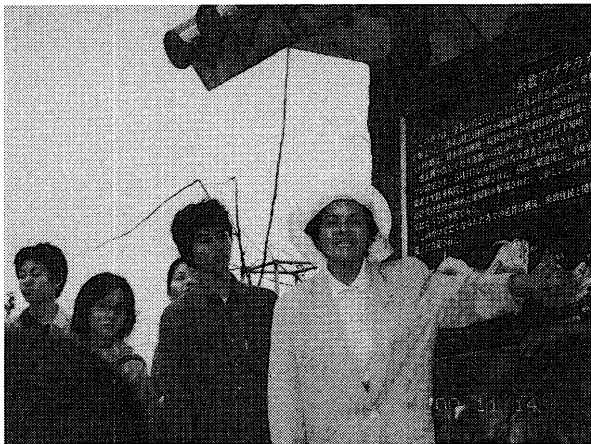
ホテル発(8:20)ー座喜味城跡(8:50)ー(象のオリ・トリステーション)ー安保の見える丘(10:15)ー昼食ー那覇空港(14:20)ー名古屋空港(16:15)

次のY. KさんやT. Mさんのようにアブチラガマの暗さや湿度を体感しながら平和ガイドさんの説明を聞くことが、想像しにくい戦時中の様子や人々の気持ちを理解する手助けとなった。懐中電灯を消した真っ暗なガマでの研究旅行実行委員が企画した平和セレモニーは全員が集中して行うことができた。子ども二人を含む家族10人を沖縄戦でなくした安里要江さんの講話が印象に残った生徒も多く、「思いだすとつらくなるであろう過去の事をあえて講演という形で人々に話している。すごい事だと思う。」(M. Yさん)と表現した生徒もいた。事前に安里さんをモデルにした映画、「月桃の花」を鑑賞していったことも、真剣に話を聞くことにつながったと思われる。中には、「戦争体験者はどんどんいなくなるのだから直接話を聞いたものが広がっていかないといけない」と書いたり、T. M君のように次の世代に伝えないといけないと考える生徒もあり、深く受け止めているようすがうかがえた。

「アブチラガマに入ったことはすごく衝撃でし

た。入ってから、中で平和セレモニーをするとき、懐中電灯を消したら、何も見えなくなって怖くなりました。こんな中では、とても生活できないし、とても広かったので、誰かとはぐれてしまったら、とても心細いだろうなと思いました。でも、実際にはここで、生活をしていたのです。老人も子供も、赤ちゃんも毎日おびえながら。もうガマには二度と入りたくないと思いました。私にはとても耐えられないです。でも、一番はじめにガマに入ったことで、沖縄戦のことが少しわかったような気がしたし、それからの研究旅行に対する考え方もわかりました。いろいろなところを見たけれど、やっぱり、戦争を体験した人に話を聞かせてもらうことは、とても貴重なことだと思いました。」(Y. Kさん)

「沖縄に行って自分の心も一歩成長した気がした。ガマの中はスゴク静かで暗くて、あのような所に人が住んでいた。戦争はそこまで悲惨なものだったんだとあらためて感じた。平和メッセージを書いた時、どんどんいろんな言葉がでてきてまとめるのにたいへんだったくらいいろんな事を感じた。なぜ人間どうしが殺し合うのか。なんのために戦争をするのか。などいっぱい考えた。」(T. Mさん)



アブリラガマ前にて説明を聞く

「あのガマの中での痛む心や安里さんらのうその様な話すべてが記憶から消えようとしてるんじゃないかな。これは、わすれちゃいけないんだ。僕らは、過去と現実の沖縄を見てきた、聞いてきた、触れてきた。だから、これからの命のためにこの話を自分の子供にも話せるように、心にしまっておくべきだね。」(T. M君)

二日目は各クラスごとにバスの中で平和ガイドさんの説明を受けながら移動した。このため、生徒にとっては休むときがない最もハードな一日であったようである。大渡海岸では、アメリカ軍人であった父とともに子ども時代を沖縄で過ごし三線に魅せられたバイロンさんの演奏を聞いた。演奏後生徒たちはバイロンさんを取り巻き、三線を弾かせてもらったりしていた。B組の2班は民謡について調べていたため、追求活動の中で手に入れた歌詞をプレゼントして喜ばれた。

三日目のフィールドワークでは生き生きと活動していた。ホテルに戻った生徒を迎えていると、もらってきたハブの皮や買ってきたかんから三味線を嬉しそうに見せてくれたり、調理師専門学校で実習して作った紅芋パイを味見させてくれるなどした。訪問先は(4)の表のとおりである。

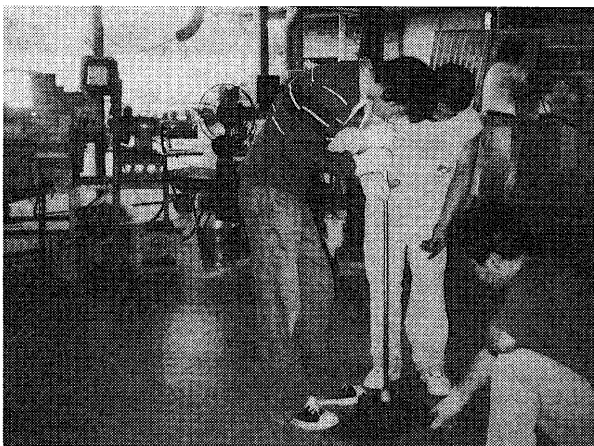
三日目の平和メッセージ書きは、印象の強い現地にいる間に沖縄研究旅行を通して感じたことや考えたことを書き留めることがねらいである。各班ごとにお互いに推敲しあうなどしながら完成させることができた。

#### (4) 沖縄研究旅行フィールドワーク

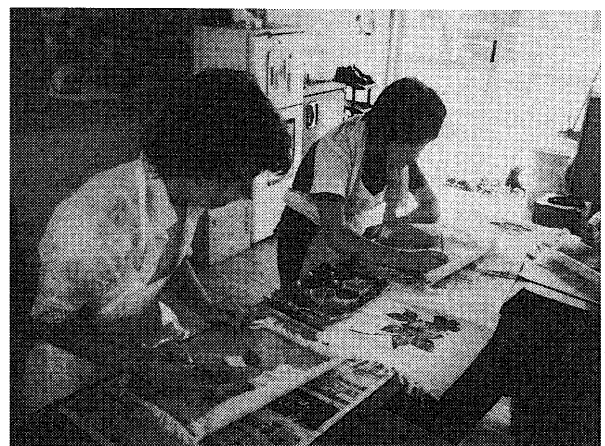
各クラスを6個のグループ(5~7人)にわけてフィールドワークの計画を立てた。今までの沖縄研究旅行は毎年研究集録にまとめられていることと、今までの総合人間科でフィールドワーク先探しになれているためにスムーズに決まるグループが多かった。各グループの研究テーマとフィールドワーク先は次の通りである。

班	研究テーマ	訪問先午前	午後
A-1	ハブ	ハ虫類センター	沖縄こどもの国
A-2	基地との遭遇	アメラジアンスクール	沖縄県庁 普天間飛行場・那覇公安施設返還問題対策室
A-3	沖縄の家庭料理	沖縄調理師専門学校	牧志公設市場
A-4	沖縄の伝統的な紅型	那覇市伝統工芸館	那覇市伝統工芸館
A-5	沖縄でしか見られないものを見る	アセロラ農場	名護コープ、ナンセイショッピングセンター、東江ショッピングセンター 見学

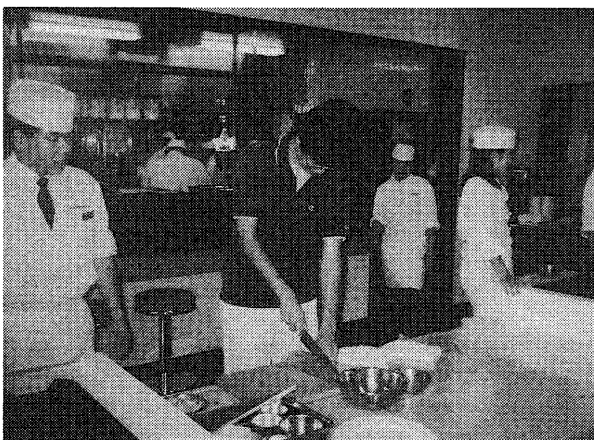
A-6	文化	琉球の館	沖縄工芸村
B-1	基地と暮らす沖縄の人々	沖縄タイムス	基地の町にて現地調査 那覇市→浦添市→宜野湾市→北谷町→沖縄市→金武町→恩納村
B-2	灼熱UTA☆GOKORO ～闇の住人／光の言葉	知念村教育委員会 御嶽（セーフアウタキ）	民謡館 遊びどくる
B-3	紅型	那覇市伝統工芸館	城間紅型研究所
B-4	琉球空手	文武館空手古武道道場	宮里空手道場
B-5	沖縄戦による自然破壊	佐喜真美術館	琉球大学 理学化学
B-6	沖縄の甘味	パイナップルパーク	琉陽製糖所（さとうきび工場）
C-1	沖縄基地問題	うないネット・ゴザ	キャンプ・ハンセン、キャンプ・シュワブなどを観察
C-2	沖縄の家庭料理とお祝いの時の料理	牧志公設市場	ゆいな農協 紅いも加工センター
C-3	沖縄の伝統工芸	工芸指導所	沖縄芸術大学染色科
C-4	産業におけるガラス工芸とパイナップル	琉球ガラス村	パイナップル農家
C-5	文化	松田三味線	琉球大学理学部物理地球科
C-6	自然 ～自然破壊と平和～	マリンガールプロダイブ	沖縄大学



ガラス工芸に挑戦



紅型を製作しているところ



ゴーヤーチャンプルに挑戦

次の文は紅型を体験してきた生徒の文であるがフィールドワークを通して、紅型に関する知識や体験を増やしたのみでなく、自分の生活圏との比較というように自分自身に引きつけて考えたり、文化の伝承という大きな観点にも視野が広がっている。

「三線の音に合わせて歌う平和ガイドさんの笑顔に“ああ、沖縄の魂なんだなあ”と思った。戦中、戦後を生きた人にとって三線の音とそれに合わせて歌う歌は、いつまでも戦争の悲劇とその仲でも忘れない希望の象徴という役割があるのだろう。本土にそれと同じような心の中に生き続ける文化があるのだろうか。私が住む名古屋にはある

だろうか。沖縄の文化は確実に次世代へと引き継がれている、とこの旅行で実感した。(中略) **大勢**の高校生が参加していたエイサー。フィールドワーク先では、**沖縄のすべての小学校で紅型の授業があるとおそわった**。沖縄の人も、沖縄の自治体も沖縄の伝統文化を受けついでいこうとする姿勢がある。」(A. Sさん)



バイロンさんの三線演奏 大渡海岸にて



内間青年団のみなさんと記念撮影

次の文はアメラジアンスクールを見学した生徒の文であるが、改めて学校について考える機会となった。

「軍人と日本人のハーフである子どもたちと遊んだとき、私の目には日本人の子ども達よりも**すばらしい輝きをもつ子どもたちの目が映っていた**。アメラジアンという特別な言葉で呼ばれ、差別を受けたり、コンプレックスをもったりした子ども大勢いるはずなのに、私たちに接しているときの彼らの目は、アメラジアンという自分たちに誇りと希望をもっているようだった。アメラジアン達はアメラジアンスクールでの生活を楽しんでい

た。日本はなぜアメラジアンスクールを認めないのだろうか。しかし、日本の学校で教育を受けている子どもたちが**あんな輝きをもった目で人に接しているだろうか**。(中略) 私は、2002年からの総合学習は**学校が変化できるチャンスだ**と思っている。自分の好きなことをとことん追求できて、いろいろな体験もできる。学校を楽しめる人が増える、そうすれば日本社会は少しは平和になるのではないだろうか。」(E. Nさん)

食文化を調べた生徒は、次のH. E君のように、家族で沖縄料理を食べにいったり、M. K君のように家族に沖縄料理を作った。他にも、沖縄関連のテレビや新聞を読むようになったなど日常生活における変化が見られる生徒も多かった。

「沖縄料理に興味を持った僕はつい最近沖縄料理をお店に食べにいった、沖縄では食べられなかったものを食べ、やはり興味深いものであると思った。」(H. E君)

「一番大きいのは沖縄の代表料理“ゴーヤーチャンプル”“サーターアンダギー”の調理法を覚えて名古屋に帰ってきたこと。家族にも僕の体験してきた沖縄をほんの一部だが、僕の作った沖縄料理で伝えることができたと思う。」(M. K君)

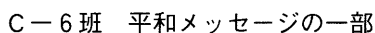
また、次のK. Mさんのようにフィールドワーク先での経験ではなく、フィールドワークにむけての活動の中に、同じクラスの友人どうしですら意見の衝突があり、それを話し合いで乗り越える体験を通して、“平和”の基本となる感覚を身につけていく生徒もいた。

「たくさんもめたり、意見のすれ違いも何度もあったりしたけれど、それがあったおかげで、私たちのフィールドワークは**大成功に**終わりました。確かに、総合人間科の授業を通して、世界、日本、沖縄などの平和について考えることは大切かもしれません。が、しかし、**私はこのフィールドワークを通して、小さいながらも、身近な平和を感じました**。総合人間科のようなグループにわかれ、自分たちで何か1つのことをやり終えるというこのような体験はきっと他の高校では味わえないものだと思います。」(K. Mさん)

#### (5) 沖縄研究旅行フィールドワーク発表会

各グループが研究してきた内容を学校に持ち帰り、それを共有することによる“学び合い”の機会とするために、発表会を行った。

一年間の総合人間科の取り組みを研究集録としてまとめた。各班の記録係と研究係が分担して安里さんや平和ガイドさんのお話のテープおこしも行った。各班のフィールドワークの活動と平和メッセージがまとめてある。



全体としては、基地に反対する意見が多かったが、

「パネルディスカッションをして、みんなのいろいろな意見を聞いて多くのことを考えることができ

ました。パネルディスカッションをする前は“だんぜん基地反対!!”しか私の頭にはなかったのに、反対するだけではなく基地があって日本が守られている状況を知り、反対or賛成なのかわからなくなりました。」(Mさん)

「難しい話が多かった中、賛成できる意見が多かった。僕の中でまだ意見ができあがっていないのでなんともいえないが、もっと自分の考えをまとめたい。」(E君)

「日本では日常でアメリカの基地問題が見られることがあって、私達高校生も、今日のように考えることがある。だけどアメリカではどうなのだろうか。ニュースで流れることはあるのか。そもそもアメリカ人は沖縄で起こっている事件を知っているのか。アメリカ人の意見を聞きたい。」(Hさん)

「確実な答えのでないパネルディスカッション、まとめてもまとめきれない。でも一つだけ確定できたのは、“価値観のぶつかり合いはあたりまえ”」(Y. Hさん)

次の生徒のように、他の人の意見を聞くことにより、自分の考える観点が広がり深まっていくととらえる生徒もいた。

「特に印象に残っているのは最後に行ったパネルディスカッションです。事前学習や研究旅行で基地について考えてみた上でのパネルディスカッションだったからというものがありますが、クラスメートがいろんな意見を持っていたことに驚いたから。一方性からの考えが、みんなの多方面からの意見によって新しく変わったと思います。(中略)最初に思った基地反対という気持ちは変わりません。でもそれに関わっている人々のことをよく考慮することが大事だということを学びました。」(H. Sさん)

#### 4 一年間の取り組みを顧みて

次の生徒たちのように、現地について体感することによって想像する力が成長したと考える生徒が多かった。

「高2になるはるか以前から沖縄関連の書物を意識せずとも目を通すことができたので、と言っては少々おごっているとお叱りを受けそうですが、正直なところ私の最初の感想—新高2、沖縄への取り組み第1回目—は“え、今さら”でした。沖縄の悲惨さならもう十分わかっているじゃあないか。ひめゆ

り部隊、地上戦、基地返還問題…。私はおろかでした。全くもって愚かとしか思えません。文献や教科書はあくまで“表面上”の事実に過ぎません。またそれはしばしば編集するものによって歪曲された事実でもあるのです。それでは“**真実**”は**何処に存在するのか？それは、現地です。現地にあるのです。**想像の世界ではない生々しい戦争の傷跡の残る、“あの沖縄”です。真実を知るためには私のこの目で、この両手、両足でしっかり大地を踏みしめて風土の特徴をすることです。(中略)爆撃機の音におびえ、乳が欲しいと泣き叫ぶ赤ん坊をあやす母親。手足や内臓が吹っ飛びもがき苦しむ兵士。かれらの痛みを軽減してやろうにも不足している麻酔薬。島民達が確かにそこに居たそのぬくもりを理解することが総合学習の基本だと思います。」(M君)

「“知ることは感じることほど重要ではない”という意味の言葉を言ったのはレイチェル・カーソンだが、本当だと思う。沖縄クイズでひめゆり学徒のことがあったが、何人というような具体的な数字よりも、平和祈念館にあった少女たちの写真の方がはるかに印象に残っている。」(M. Sさん)

「アメリカ軍基地は私の思っていたものよりも更に大きなものでした。今は戦争もないから飛行機だって、そんなに飛んでなく、ただ置いてあるくらいなのかと思っていたところも私にはありました。しかし、名古屋で飛んでいる飛行機とは違い、テレビとかで見たことのあるような、緑色の飛行機などが次々と飛び回っているのです。あの飛行機を見るだけでも敵に攻められているような卑屈な思いをするのに、あの音で頭の上を飛び回られたら本当にまいってしまいそうです。人の声を聞き取ることでできない程すごい騒音でした。」(H. Nさん)

もちろん総合人間科に価値を置かない生徒、活動したい気持ちがあってもできない生徒、M. Hさんのように、自分独自の価値をつける生徒といろいろいた。

「今年のグループ研究であらためて集団で1つの事をする事のまどろっこしさ(?)を知った。やっぱり一人できままにやるのがらくだ。でも社会にでたら集団でする事の方が多いと思う。その時わがままいってたらくびにされるので、総合人間科は社会にでるための練習なんだからと思うことにする。」(M. Hさん)

次のT. Oさんは、グループ活動になかなか参加で



きないでいた生徒である。私たち教員の目から見ると、話し合いの時間にお化粧をはじめるT. Oさんには、まわりは見えてないように思われた。しかし、次の文を見て、楽しんで取り組む友人に対する羨望をもっていることをはじめて知った。彼女がどの時点からどんな興味のあることを減らし続け、お化粧や服装にしか興味を示さなくなったのか。そうなった生徒に対してどのようにバックアップができるのかを考えていかねばならない。

「興味のないことはとことんやる気になれない。何に対しても楽しそうにやっているみんながうらやましい。いろんな人がいる。(中略)協調性がないみたいです。だめです。ほんとに疲れます。(中略)もう考えたくないです。深く考えないでいきます。決められた道は何の抵抗もなく歩いていくのが一番です。」(T. Oさん)

次の生徒もグループ活動ができないでいた生徒である。この生徒の文の中にも、自分が他の生徒と同様に活動できないことを肯定するのではなく、できない自分を責める文があることに驚いた。1年生のときのような個人テーマ追求の場合には、これらの生徒に対しても何か興味のあることから糸口をみつけて追求活動をしていく手助けができるのであるが、グループ活動では難しかった。

「総合人間科を通して私はすごく思い知らされたことがあります。それは、私がとても協調性のない人間だということです。この教科に関して私はどれほど友達や先生、班のみなさんに迷惑をかけたかわかりません。本当にそれに関しては悪いことをしたと後悔しています。そして、私という人間は何ておろかな人間だろうとも、感じさせられました。この教科はその人の個人の性格がたいへんあらわれやすい教科だと思いました。この教科はとても苦手です。」(N. Mさん)

次の生徒たちのように、自分自身の変化を見つめ表現している生徒も多かった。

「今思い返してみると、この4日間は確実に私たちの心に“何か”を残した。“何か”はヒトによってさまざまだ。でも、その残った“何か”はとても大切なものだ。これからの未来に影響を与える大切な必要なものであろう。なくしてはいけない、ずっともっていなくてはならないけれど、ただもっているだけではダメなものだ。後世に、他の人々に広め、

残さなくてはならないと坎じる。」(M. Kさん)

「1年間の総合人間科の取り組みをしてもものの方が変わった気がする。前までは“今が平和なんだからそれでいい”みたいな考えだったけど、今の私の考えは違う。過去が知ってみたいと思ったり、この先平和を維持するには、どうしたらよいのかと思ったりする。ある意味すごい進歩したと自分は思う。」(M. Hさん)

「“沖縄に何の意味があるのか、自分の興味のあることだけを調べればよいのではないか”と思いながら聞いていたのを覚えています。けれども、研究を進めるにつれて、一つの島から、とても重い日本の歴史、そして平和の重要性を感じることができるようになりました。それは実際に沖縄に行くことにより、一層大きなものとなり、今では、自分の知りたいことだけを調べればよいという私の考えはなくなりました。」(Y. Hさん)

また、次の生徒のように自分自身の毎日の生き方を見直すきっかけとなった生徒もいた。

「本当にその工房の人たちは紅型を愛しているんだなあ、と心から思った。『一枚の布の中に四季を全部盛り込めるのは紅型だけだと思います。』(中略)私は、心から何か一つの事物を愛し、それを次世代へ受け継いでゆく彼女の姿に何か言葉では表現できないような思いを感じた。沖縄から帰った後もその思いは消えなかった。私の普段の生活をながめているとはっきり言って不規則で墮落していてとても何か1つの事に熱中するようなことはないような気がした。いや、そうなのだ!!これを機に私は人生においての目標、将来への展望を見つめたいと心底感じた。」(M. Mさん)

次のK. Nさんは“父親の死”というつらい体験を通して改めて戦争の痛みを実感している。

「今まで戦争で何百万、何千万という人間が死んでしまうということは知っていて悲しいことだとも思ったけど、沖縄へ行って、いろんなところを見学し、話を聞き、戦争によって人が死ぬということは悲しいだけじゃ済ましてはいけなく、この先何百年経っても忘れてはいけなくことだと確信した。私は、去年の末に父親の“死”というものを体験した。それは言葉にはできない程悲しくて、つらくて、何ともいえないむなしさを私に残した。こういう悲



しみが何百万以上あったと思うと本当にぞっとする。(中略) 私一人にという人間にできることは、あるのかわかんないけど、私たちには戦争の怖さと意味があるのか、という考えについて先に残していかなくてはいけないと思う。」(K. Nさん)

次のH. M君やT. Mさんのように、“平和”とは何かと自分の言葉で定義をしようとする生徒も多かった。“戦争がないことだけが平和ではない”と考え、今の日本が“平和”であるとはいえないととらえなおし、どうしたらその“平和”をつくることができるかの模索をはじめている。

「沖縄研究旅行が近づいてきたとき、僕はまだ、そんなに重要に考えていなかった。“沖縄？暑いのかな、寒いのかな”などのんきに考えていた。(中略) 僕が感じたことは、現地の戦争の様子が僕が考えていたものよりもはるかに大きいものであったということだ。平和ガイドさんの話、アブチラガマ、米軍基地、平和の礎。どれも僕には衝撃的だった。そして、この旅行により僕の価値観が少し変わったように思う。以前は戦争というものは、国と国の軍隊が戦って勝敗を決めるというようなものだと考えていたが、それは間違いだった。“戦争”という実体のつかめないものは、民間人、軍人関係なしにそれらをのみこみ、戦わせる。以前は仲がよかったものを、あえて悪くしたり、罪もない人々を殺害したりする。そしてそういうことが公然と行われる。誰も止められず、後には悲しみしか残らない。沖縄はそんなことを僕に教えてくれた。ただ“戦争はいけない”と知っているだけではなく、実際に“戦争”というものを知ることが重要で大切だと教えてくれた。“平和”というものは何だろう？“平和”という言葉の意味もわからなくなってきた。(中略) 本当の平和とは“誰もが笑っていられる状態”であると思う。」

(H. M君)

平和とは戦争がないこと——そう当たり前のように思っていた私が、本当の平和とは何なのか、と真剣に考え始めたのは、確か10月の頃、平和宣言文を書いているときだった。武器がないことがそのまま「平和」というわけではない。戦争をしなればよいというでもない。人々の心の中に悲しみや憎しみ、怒りが残っていたら、それは本当の平和ではない。それは見かけだけの平和で、その見かけはすぐに崩れてしまう。

なぜ、戦争が起こるのだろうか。戦争には何の得もない。たとえば、物質的な面では土地や権利や資源を手に入れたとしても、恨みを買ひ、必ず報復を受けるという面では、マイナスなのである。人を大量に殺してでも目的を達成する、それはどの理由が、この世に存在するのだろうか。

戦争は幸せな時間を奪い、悲しみ、怒り、淋しさを人の心に残す。ひめゆり平和祈念資料館で見た

女学生達の笑顔を見たとき、もっとも痛切にそう感じた。今、戦争が起こったら、私達にも同じことが起こるのだ。

住民を巻きこみにした日本軍を、私ははじめ、憎んでいた。だが、最近思うのは、悪いのは兵隊達だけではないということだ。兵隊達だって、人間である。だが人間のままでは戦争はできない。だから感情を殺し、命令に従うのみの機械となる。しかも、沖縄に配属された兵士は皆、救援もなく見捨てられていたのだ。兵士は加害者でもあるが、同時に被害者でもあるのだ。

今でも世界のあちこちで戦争が起こっている。最新の兵器がにらみあっている。武器をなくすだけで本当の平和が来るわけじゃないが、まず、ここから始めるしかない。憲法第九条を持つ日本は、武器を捨てるというその先駆けになったはずではなかったか？それなのに、今日本には世界でも有数の軍隊がある。そして米軍基地が存在する。沖縄の人々は、誰も基地を他の県へ移せとは言わなかった。偏りすぎているとは言っていたが、沖縄の人々が目ざしているのは、あくまで基地をなくすことであつた。基地が守るものなんて何もない。「平和を守る」なんてウリである。軍事基地は、人や、その他の生物や、地球そのものを壊すのみである。

(T. Mさん)

一年間を振り返ると生徒とともにわたしたち教員も学ぶことが多い一年であった。そして、次のA. W君が述べているように、生徒一人一人の取り組みの姿勢や受け止め方の深さには大きな違いがあった。

「総合人間科はすべてを教示するものではなく、それを促すだけであり、まったく生徒本意のものである。生かすか、無駄にしてしまうかは自由なのである。」(A. W君)

しかし、この一年間の総合人間科での取り組みは、沖縄を通して“平和”を考えただけではなく、自分自身を見つめ直す大切な機会となった。このことは、これから、自分の才能を見つけて育ててゆく生徒たちにとって大切な機会である。次のK、Hさんのように、すぐに気づくことがなくとも、そして、個人格差はあるにしても、これからの進路を切り開いて成長してゆくキャリア形成の手助けとなることを願っている。

「総人はその原石を磨く1つの手段ではないかと思います。私の頭の中でそれは、多くの体験をし、多くのことを学び、大人になってゆくことだと認識しています。原石からきれいな宝石になること、それは自分がどんな才能をもっているのかわからないが、才能を見つけるために努力し大人になって最大限に自分の才能を発揮することだと思います。総人はその手助けなのだと思います。」(K. Hさん)